

この国に王太子であるオスカーに持ちこまれる仕事は、多くが机の上で完結する仕事だが、中にはそうでないものも混ざっている。

今日彼のところに来たのも、そんなものの一つだ。

「これは……面倒だな」

持ちこまれた書類を手に、執務室を出ようとしたオスカーは、そこで入ってきた守護者に出くわした。黒髪黒目の魔女は、彼を見るなり美しい顔をしかめる。

「なんですか。脱走ですか。駄目ですよ」

「違う。何だその第一声は……」

「日頃の行いじゃないですかね。ほっとくとすぐ余計なことに首を突っこみますし。で、脱走じゃないならどこにいくんです？」

「調べ物だ」

言われてティナーシャは猫のように首を傾げる。

それでも信用できないのか好奇心か、彼女は部屋を出るオスカーに並んで歩き出した。

「調べ物ってどこにいくんですか？」

「資料室。城の尖塔の一つが書架になってる」

「え、知りませんでした。そんなのあるんですね」

「古い地方資料ばかりだから。俺も数えるほどしか入ったことがない」

それでも、地方都市からの案件でその資料をさらう必要が出てきたのだから、見に行かなければならない。文官に持ってこさせることもできるが、おそらく自分

で取りに行った方が早い。

オスカーは魔女を連れて、普段あまり入らぬ城の北に足を踏み入れた。そこにある尖塔の螺旋状の階段を上り始める。

途中から階段の両脇の壁が書架になっているのを見て、ティナーシャは感心の声を上げた。

「すごいですね。まるでお城みたいですよ」

「城だからな」

「でもこれ、探しにくいし取り出しにくくないですか？ 私なら飛ばすけど、普通の人は階段途中の本棚で背よりもずっと高い場所とか取れないでしょう」

「保存するためだけの場所なんだ。参照することが減らないものをしまっている。こういうのは増える一方だからな」

「大変ですね……ここがいっぱいになったらまた塔を建てるわけですか」

「お前の塔に置かって手もある」

「あれは私の塔だから！ 私物化しないでください！ 思いっきり国外！」

魔女はそう叫んでしまうと、所蔵されている資料が気になるのかふわりと浮き上がる。階段を上って行くオスカーに先行して、彼女は宙を浮きながら本の背表紙を見ていった。

「これ借りることってできるんですか？ 禁帯出？」

「お前だったら別に持ち出していいぞ。ちゃんと戻しとけ」

「ゆるいこと言わないでくださいよ。国外の人間ですし、規則は守りますよ」

ティナーシャは、古い一冊を取り出す。それはファル

サス南東部にある小さな農村についての記録だ。宙で逆さになりながら本を開いている彼女を、オスカーは見上げる。

「ぶつかるぞ。そろそろ最上階だ」

「っと。扉があるんですか」

すんでのところまで扉にぶつかりかけたティナーシャは、回転して天井を蹴った。黒い服の裾がふわりと広がる。そうして契約者の隣に戻る魔女に苦笑して、オスカーは扉の掛金を開けた。

中は三階分ほどの吹き抜けになっており、外周は全て書架、内側は同心円状に弧を描く本棚が複数置かれている。オスカー自身、子供の頃は迷路のようだと喜んだものだが、今となっては増え続ける資料に苦慮して内側に本棚を増やしたのだと分かっている。

彼は記憶を頼りに、中心近い本棚に向かった。

「俺は探し物をするから適当に見ててくれ」

「はい！」

小柄な魔女は弾む声を上げて、ばたばたと外周に駆けていく。まるで初めてここに来た時の彼自身のようだ。数百歳に見えないそんな彼女にオスカーは微笑しながら、目的の棚を探し始めた。

数分後、棚の向こうから彼女の声が聞こえてくる。

「オスカー、この棚って動かせるんですか？」

「動かない」

資料を手に取りながら反射で答えたオスカーは、だが次の瞬間顔色を変えた。何かを言うより先にその場を駆け出す。彼は、ティナーシャの声が聞こえた方へ駆け——魔法でどかされたのだろう本棚と、その後ろに隠されていた扉を視界に入れた。

魔女は怪訝そうながらも、その扉に手をかけて――開ける。

「ティナーシャ！」

その名を呼んでオスカーが彼女の体を引き寄せると、魔女が塔の外に落ちかけたのは、ほぼ同時だ。

開かれた扉の外は、地上まで止めるものが何もない。落ちたら遙か下に叩きつけられるだけの場所だ。

彼女は、さすがにオスカーの腕の中で呆然とその景色を見下ろした。彼女の代わりに落ちていく本を見て、
呟く。

「び、びっくりしたんですけど……」

「こっちの台詞だ。なんで無音で本棚動かしてるんだ」

「あからさまに棚の色が違うから気になって……」

ティナーシャは、壁に固定されている左右の本棚と、問題の本棚の色が違うのに気づいて動かしただろう。

オスカーは彼女を後ろに置くと、手を伸ばして外に開いてしまった扉を閉めた。

「ここを作った王がつけさせた扉なんだ。何に使うものかは分からない。『人ならざるものに会う為に』って話もあるくらいだ。さすがに危ないから、その王の死後に塞がれた」

「塞がれた、って思いっきり開きましたけど……」

「普通は本棚の前に置いたら扉は開かない」

言いつつも、オスカー自身が十歳の頃、同じことをしたのだからそれ以上は何も言えない。あの時彼は、中の本を全て取り出して、幼馴染のラザルと本棚を動かしたのだ。今、思い返すとラザルを死なせなくてよかったと思う。

安堵の息をつく彼に、魔女は遠慮がちに問うた。

「でもオスカー、私飛べますよ」

「知ってる。でも予想外に落ちたら死ななくても恐い
だろ」

「……そうですけど」

まるで口の中に飴を押しこまれた子供のように、魔女は不思議そうに頷く。そんな彼女の頭にぼんと手を置くと、オスカーは階段に向かった。

「とりあえず本棚戻しとけ。俺は下に行ってくる」

「あ、帰るんですか？」

「戻ってくる。見つけた資料を地上に落とすした」

若干の決まり悪さを覚えながら彼が返すと、ティナーシャはその場で飛び上がる。

彼女は急いで本棚に戻すと、階段を降り始めるオスカーを追いかけてきた。一歩後ろを行きながら彼の顔を覗きこむ。

「ごめんさい、オスカー」

「別にいい。お前がなんでもないなら」

微笑して降りていく彼の隣に、魔女は猫のように大人しく付き従う。

記録にも残らない平凡な一日。

けれどその記憶は、魔女の手で改めて封印された扉の中に、きつと残っている。

「Unnamed Memory 青き月の魔女と呪われし王」

古宮 九時 (電撃の新文芸)

2019/1/17 発行